

世界文学全集 II-3

セルバンテス

ドン・キホーテ

会田 由 訳

河 出 書 房

世界文学全集 II-3 セルバンテス



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和39年6月10日 初版発行

昭和44年11月8日 13版発行

定価 430 円

訳 者 会 田 由

発 行 者 中 島 隆 之

印 刷 者 佐 藤 勇

装 幀 原 弘

印 刷・有限会社 亘明舎印刷所

製 本・加藤製本株式会社

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397-310303-0961

目 次

前 篇 一

後 篇 二五

訳 注 五三九

年 譜 五五三

解 説 (会 田 由) 五五七

才智あふるる郷士ドン・キホーテ・
デ・ラ・マンチャ 前篇

第一章

名にし負う郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの
為人および日常について。

名は思い出したくないが、ラ・マンチャのさる村に、さほど前のことでもない、槍かけに槍、古びた櫛、瘦せ馬に、足早の獵犬といった、型のごとき一人の郷士が住んでいた。昼は羊肉よりも牛肉を余分につかった煮込み、たいがい晩は昼の残り肉に玉ねぎを刻みこんだからしあえ、土曜日には塩豚の卵あえ、金曜日には扁豆、日曜日になると小鳩の一皿ぐらゐは添えて、これで収入の四分の三が費えた。そののこりは、厚羅紗の服、祭日用のびろうどのズボン、同じ布の上ばきにとのえた。家には四十は黒っぽいベリヨリ織で体面をととのえた。家には四十歳を過ぎた家政婦と、まだ二十歳にならぬ姪と、それに瘦せ馬に鞍もつければ、剪定用の鉋もふるゐ、畑仕事や市場への買物に行く若者がいた。われらの郷士の齡はまさに五十歳になんなんとしていた。顔もからだも瘦せひからびてはいても、骨組みのがっしりした男で、恐ろしく

早起きの、大の狩好きだった、なんでも通称をキハーダもしくはケサーダと呼んだという者もいるが、この点に關しては、それについて書いている著者のあいだで多少の異論がある、もつとも信憑するに足る臆説によると、ケハーナと呼んだともいう。しかし、これはわれわれの物語にはさして重要ではない。彼に關する物語の中で、ほんの少しでも真実からそれさえしなければ十分だからである。

ところでご存じねがいたいことは、上に述べたこの郷士が、いつも暇さえあれば（もつとも一年のうちの大分が暇な時間であつたが）、たいへんな熱中ぶりでむさぼるごとく騎士道物語を読みふけたあまり、狩獵の楽しみも、はては畑仕事のさしずさえことごとく忘れ去ってしまった。しまゐにはその道の好奇心と氣違い沙汰がこうじて、読みたい騎士道物語をかうために幾アネーガという畑地を売り払ってしまった。こうやって、手にはいるかぎりのそういう書物のことごとく己が家に持ち込んできたのであるが、あらゆるこの種の本の中で、あの名高いフェリシヤーノ・デ・シルバの作ったものほど彼の嗜好に投じた作品は一つもなかった。なぜならその文章の明快な点と、あの独特のこんがらかつた叙述が、彼にはまるで珠玉とも思われたからであつて、中でもどこを聞いても「わがことわりに報い給う、ことわりなきこと



わりにわがことわりの力も絶えて、君が美しさをなげきかこつてもまたことわりなり」などと書いてある、ああい恋の口説や決闘状を讀むに及んでいっそうその感を深くしたからである。それにまた、『星辰^{せいしん}をもて

君が神性をいとも神々しく力づけ、君をしてその高貴にふさわしきふさわしさに、まさにふさわしき人ともなし給ういとも高きみ空……』などというところを讀んだ時にはなおさらであった。

こういうたいへんな叙述のおかげで、哀れにもこの騎士は正気を失つて、これを理解し、その意味を底の底までつきつめようと夜の目も寝ずにつとめたのであるが、こればかりはよしんばアリストテレスがそのためにばかりによみがえつてきたところで、しよせん意味を引き

出すことも理解することもできなかつたに違いない。

彼は村の住職と（これはなかなかの物識りで、シグエン^{シグエン}で学位をとつた男であつたが）、バルメリン・デ・イングラテルラ^{イングラテルラ}とアマデイス・デ・ガウラといずれが立派な騎士であつたかということでしじゅう議論を戦わせた。しかし同じ土地の床屋のニコラス親方は、どつちも日輪^{カリエロデルゾーロ}の騎士には及びもつかぬ、万が一これに比肩^{ひびかん}しうる者があつたとしたら、アマデイス・デ・ガウラの弟ドン・ガラオールぐらいのものだ、なぜかといへば、彼は何が起ころうとびくともせぬ精神の持主だ。それに彼は乙に氣取つた騎士でもなければ、兄貴のように泣き虫でもない、それでいて武勇にかけてはいささかも兄貴にひけは取らないという意見であつた。

要するに、彼はすっかりこの種の読物にこつたあげく、夜はまだ明るいうちから白々と明けはなれるまで、昼は昼でまだ暗いうちからとつぷりと暮れはてるまで、ひたすら読書三昧にふけた。こんな工合に、ろくに眠りもせず、無性に讀みふけたばかりに、頭脳がすっかりひからびてしまひ、はては正気を失うようなことになつた。数々の妖術^{まじまじ}だとか、争闘、合戦、決闘、手負い、求愛、恋愛、煩悶だとか、その他さまざまの荒唐無稽な出来事など、すべておびただしい本の中で讀んだ、ああいう一切の幻想が彼のうちに満ちあふれ、そうしてああ

いう彼の読んだ雲をつかむような作り事の一切のからくりはことごとく真実で、彼にとつては世の中でこれより確かな話はないと思われたほど、彼の空想の主座をしめたのだった。

まったくの話が、思慮分別をとりの昔失つてしまつて、これまで世の氣違ひの誰一人として思いつきもしなかつたような、およそ奇怪至極な考えにおちいるようなことになつたのであるが、それはみずから遍歴の騎士となつて、甲冑に身をよそひ、馬に打ち乗り、あらゆる冒険を求めて世界じゅうを遍歴し、遍歴の騎士の慣いとして、かねがね読み覚えたあらゆることをみずから實際に行なつて、こうしてありとあらゆる非行を正し、かつは数々の危険と窮地に身を呈して、見事これらを克服したあかつきには、名声をとこしえに竹帛に垂るることにもなるということが、己が名誉をいやますにも、国にくすのにも時宜を得た肝要なことと思われたのである。この氣の毒な男は、もうすでに自分の腕の力で、少なくともトラピソンダ帝国の帝位に登つたような氣になつていた。かくて、こういう楽しい空想を抱き、その中で感得する不思議な喜悅にせき立てられて、ひたすら自分の望むところを実行に移すことを急いだ。

そうしてまず最初に彼のしたことは、すっかり錆び朽ちて黴におおわれたまま、何百年ものあいだ片隅にうち

すて忘れられていた、何代も昔の先祖の古鎧を掃除することだった。これをできるだけきれいに掃除したり、つくろつたりしたが、見るとこれに大きな疵のあることに氣がついた。ちゃんとした面頬つきの兜ではなく、ただの鉄帽子だったことである。しかしこの疵は自分の手細工で補ひをつけた。というのは厚紙でどうにか面頬らしいものをこしらえたが、これを鉄帽子に取りつけると、どうやらちゃんとした面頬つきの兜らしい恰好になつたからだった。じつは、それが丈夫で、切先の危険に十分耐えうるかどうかを試そうと、自分の劍を抜いて二太刀浴びせたが、最初の一太刀でたちまちにして一週間の努力の結果を水泡に帰せしめた。こんな工合に、あつけない粉々にこわしてみると、さすがにありがたくなかつたので、こういう危険をさけるために、もうこれなら大丈夫とみずから満足のゆくまで、内側に鉄の筋金をあてがつて、もう一度細工にとりかかったが、今度はもう一度試す氣はさすがになかつたので、そのまま採用して、みずからしごく申し分のない面頬つきの兜だということにした。

その次に瘦せ馬を検分にいったが、これは一レアルをくずした小銭カワルトスよりたくさん蹄裂れクワルトスがあつて、おまけに *tantum pellis et ossa fuit* (皮と骨のみなりき) という例のゴネーラの馬よりもひどい欠点だらけではあつた

けれど、彼の目にはアレクサンドロス大帝のブケフェルスも、エル・シードのバビエカもてんで足もとにもよりつけないと思われた。これになんと名づけようかと思ひふけて四日間が空しく過ぎた。それというのも(彼の考えによれば)、これほどあつばれた騎士の馬で、のみならず馬そのものもこれほどの逸物で、何かめざましい名前を持つていないなどということは不合理だったからである。そこで、これが遍歴の騎士の乗り料となる前にどういふ馬だったか、あわせて現在の身分もはっきり現わすような名前をつけてやろうと心をくだいた。なぜなら主人公の身分が変わるにつれて、馬も名前を変え、あまつさえこれから勤める新たな身分と新たな任務にふさわしい立派な由々しげな名をつけるということはしごく理屈にかなったことだったからである。こうして自分の記憶や空想の中でこしらえたり、消したり、へらしてみたり、つけ足したり、こわしたり、それからまた作りなおしたりしたたくさんの名前の中で、最後に『さぎの瘦せ馬』と呼ぼうと思いついたが、これは彼の見るところで、気高く、口調もよく、しかも現在の身分になる前に駄馬だった身の上を現わしたばかりか世のあらゆる駄馬の中でまず筆頭だということをこよなく現わした名前だった。

こんな自分の好みにびったりした名前を馬につけてみ

ると、今度は自分自身にも名前をつけたくなくて、その思いにふけているうちに、さらに一週間を過ぎしたが、ついにみずから『ドン・キホーテ』と名乗ることになった。この点から、さきにも述べたとおり、この実録の多くの作者たちは、彼の名は疑問の余地なくキハーダだったに相違ない、他の連中が言いたがるようにケサーダと呼ぶはずはないという論拠をつかんだのである。が、剛勇アマデイスが自分のことを味も素々気もなくアマデイスと名乗るだけでは満足しなばかりか、祖国の名を高めようと、己が王国と生国の名をつけ加えて、みずからアマデイス・デ・ガウラと名乗ったことを追想して、これにならって自分もひとかどの騎士らしく、己が姓に生国の名をつけ加え、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと名乗ろうと思つたが、彼の考えに従えば、これで自分の素姓なり生国をはっきりと表明し、かつは生国から異名をとって大いに生国の名を高めたつもりだったのである。

かくて鎧の掃除もすみ、鉄兜も面つき兜となり、瘦せ馬に名もつけければ、己れの改名もすんでみると、今はただ愛をささげる貴婦人を探す以外には不足な点はないということに気づいた。なぜかといえ、およそ恋愛のない遍歴騎士などというものは、葉や果実のない樹木か魂のない五体にも等しいものだったからである。彼はこん

なことをわれとわが胸に言ったものだった。「もしもわが罪の報いがか、ただしは武運にめぐまれて、遍歴の騎士には常にありがちのとおり、そこいらで巨人にめぐりあって、ただ一度の合戦で相手を倒すなり、胸中をまっ二つに切りつけるか、それともどのつまり相手に打ち勝ち屈服させた場合に、そいつを贈物として献すべき相手を持っているのも結構なことではあるまいか、しかも当の巨人が伺候して、わがいとしき佳人の前にひざまずき、うやうやしくかしこまった声音で、『奥さま、拙者ことは、マリンドラニア島の君主、巨人カラクリアンブ*と申し、いかに称えても称えがたい遍歴の騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャによってただ一度の戦いで打ち負かされた者にござりますが、拙者を貴女さまのご存分になされませうよにと、あのお方は貴女さまのおんにまかり出るようお言いつけなされたのでござりませう』と言うとしたら？」それにしても、われらが好人物の騎士はこの台詞を述べ終わつたとき、いやそれにもまして己が思い姫の名を冠すべき相手を思い浮かべたときには、いかばかり喜んだことであらう！ なんでも世人の信ずるところによると、彼の村に近いさる村に、いともみめうるわしい百姓娘があったが、ひとところ彼はこの娘に恋をしたことがあった。といつても世間の取り沙汰では、当の娘はそんなことは知りもしなければ、ついぞ

思つてみたこともなかつたというのである。その娘はアルドンサ・ロレンソという名前であつたが、彼の考へではこの娘に己が思い姫の尊称を与えたいと思つたのである。そこで自分にさして不釣合ひでもなく、しかもともすれば姫君や上臈のお名にもまごうような名前をあれこれと探したあげく、ついにドウルシネア・デル・トボーソと呼ぶことになつたが、これは娘がエル・トボーソの生まれだつたからである。

この名前はさきに己れみずからをはじめ己が持物につけた一切の名前と同じように、彼としては音楽的で、變わつていて、しかも含蓄の深い名前であつた。

第二章

才智あふるるドン・キホーテが故郷を出で立つた最初の門出について。

さて、こういう用意万端がととのつてみると、彼が毀とうと思ふ不条理、正すべき不正、改むべき非理、除くべき弊害、果たさせねばならぬ負債が山積しているのであつてみれば、己が躊躇によつて世の中に損失をこうむらせているのだという考へにせき立てられて、彼はもはやこれ以上己が計画を實行にうつすことを待とうとは考

えなかつた。そこで、自分のもくろみを誰にも打ち明けず、何人にも見られないで、ある朝、まだ夜の明けないうちに、それは七月の暑いさなかの一日であったが、一切の武装に身をかため、ロシナテに打ちまたがり、出来そこないの兜をいただき、手楯を把り槍をかいこんで、己が私心なき希望の第一歩をいかにやすやすと踏み出したかをかえりみて、こよなき満足に得々として、裏庭の小さくぐりから野原へと出て行った。しかし野原にはいるかはいらないうちに、たちまち彼はある恐ろしい考えに襲われたのであるが、これはもう少しのことで、このせつかくとりかかった企てを放擲させたかもしれない体の考えだった。それというのも、彼は正式に叙任された騎士ではない、したがって騎士道の掟に従えばいかなる騎士に対しても武器を取って戦うことはできないし、戦ってはならぬ。のみならず、よしんば叙任された騎士だったにしても、やはり新参騎士として、己が武勇によつて獲得するまでは、楯の面になんの意匠もない、白具足^{*}をまとわなければならぬということが記憶に浮かんだのである。こういう考えは少なからず彼の意図を動揺せしめた。しかし何をいうにも彼の気違い沙汰は他のいかなる道理より旺盛^{おうちげい}だったから、彼をこんな状態にしてしまった数々の書物の中であつてみずから読んだところに従つて、他の大勢の連中の行なつた先例を真似て、最

初に出会わした男によつて正式に騎士にしてもらうことにした。一方、白具足については暇のあり次第せいぜいみがき立てて、白貂^{しろくみん}にもまして白くしようと考えた。これですっかり落ちついて、馬の欲する道のほかはたどる気もなく、ここにこそあらゆる冒険の真骨頂があるとみずから信じながら、ひたすら旅路をつづけたのであつた。

彼が最初に遭遇した冒険はラピセ狭間のそれだという作者連もあれば、中には風車の冒険だという連中もあるが、しかしわたしがこの点について調査したところと、ラ・マンチャ県の年代記の中に記してあるのを発見したところでは、結局のところ彼はその日一日歩きつづけ、そして日暮れには瘦せ馬も主人公もすっかり疲れきつて、ひもじさで死にそうになつていたのである。そこで、もしや休ませてくれる、目下の窮乏をなんとかしのぐことのできそうなお城なり羊飼いの牧舎なり見当たらないものかと、ほうぼうを見わたしていると、ふと彼のいる道からほど遠からぬところに、一軒の旅人宿^{ペンダク}が見えたが、これは単なる軒端どころか、彼を救つてくれる宮殿^{パレス}導く星でも見つけたように感ぜられたのである。そこで彼は道を急いで、ちょうど日暮れ時にその旅人宿についた。

このとき戸口には二人の若い女が立っていたが、これ

はいわゆる白首しらびと言われる連中で、その晩たまたまこの旅人宿に泊まり合わせた幾人かの馬方連といっしょに、セビーリヤへ行く途中だった。ところでわが冒険家には、厄介なことに、思うこと、見ることないしは空想することが、どれもこれもすべてかつてももの本で読んだとおりにできているし、そのとおりになるもののだと思つていたので、この旅人宿を一目見るやいなや、四面の天守閣に銀色燦然たる尖塔、それに劔けんね橋も深い濠ほりもちゃんと備わり、その他一般にこいう城を描く場合のああいふ一切の付属物を備えた一個の城だと思われたのである。彼はこの城と見えた旅人宿へ近づいて行つた。そうしてそれからわずか隔つたところでロシナンテの手綱を控えて、城に騎士のやつて来るのを喇叭らふか何かで合図しようと、今にも銃眼のあいだに侏儒こわいなどが現われはしないかと待ちうけた。しかしそれもなかなか手間どる様子だったし、それにロシナンテがしきりに厩うまやへ行こうと急ぐので、彼は旅人宿の戸口へ近づいて行つた。そうしてちょうどそこにぼんやりとたたずんでいた二人の若い女を見たのだが、これが彼の目には城門のほとりに遊ぶ二人のあでやかな姫君とも、たおやかな上臈じやうとも見えた。

ちようどこのとき、はからずも一人の豚追いが切株の残った畑地を一群の豚を集めながら通りかかつて、豚を

呼びよせるのにつかう角笛つのだいを吹き鳴らした。するとこれがたちまちドン・キホーテには、侏儒こわいか何かが自分の到着の合図をしているのだという、予期したとおりのことに思われたものだから、すっかり得意になつて旅人宿とそれに例の貴婦人方のところへ近づいて行つた。女連のほうではあんな工合に甲冑かちうに身を固め、手槍や楯ものものしい風体の男のやつて来るのを見て、すっかりおびえて旅人宿の中へ今にも引つ込もうとした。しかしドン・キホーテは女たちの逃げのを見て早くも彼女たちの恐れを察し、厚紙細工の目庇まがきをかかげて、ひからびた埃ほりまみれの顔をあらわしながら、物腰やさしく、落ちついた声音で呼びかけた。

「あいや方々お逃げ召さるな。いささかの危害のご懸念にも及び申さん。なぜと申すに、およそ何人に対しても危害を及ぼすごときは、拙者の奉ずる騎士道の掟おきてにはないことをござる。ましてご両所のお姿でもわかるとおりの、やんごとなない姫君方に対してはなおさらのこと」

娘たちはあらためて相手を見つめた。そうして不細工きまる目庇まがきにかくれた相手の顔を探そうと眼まなこをこらした。しかし自分たちの生業なまわとはおよそ縁遠い、姫君方などと呼ばれるのを耳にしたものだから、思わずふき出さないではいられなかった。しかもそれがあまりにも無遠

慮だったので、さすがのドン・キホーテも思わず赤面して言葉をついだ。

「美しい方々にはしとやかと申すことが似つかわしいものでござるが、わけてもさしたる理由もなく、大声で笑うほど愚の尤なるものもござるまい。と申しても拙者は何も方々に気まずいやな思いをおさせしようと思つてこんなことを申すのでは毛頭ない。拙者にはひたすら方方にお仕え申す以外に他意はござらぬて」

この娘らにとつてなんのことやらわからぬ言葉づかいと、われらが騎士の奇妙な風体とが、いっそう女どもの哄笑をおおりにたると同時に、相手の怒りをあおりたてた。したがつてちよつどこのとき太った男だけあつて、いたつて争いごとのきらいな旅人宿の主が出て来なかつたとしたら、どんな事態にたचितつたか保証のかぎりではないが、亭主も頭絡、槍、円桶、胸当てというようになちぐはぐな物の具に身を固めた、このぶざまな風体を目にする、いまま少しのことで女連といっしょになつて、おかしさをそのままぶちまけるところであつた。しかしなんといつても、こういうものものしい武装のほどに恐れをなして、下手に出るにかぎると考へて、こんな工合に持ちかけた。

「お侍さま、もしや旦那さまがお宿をお探してでもござりますなら、まあお寝台は別といたしまして（と申す

のがあいにく手前どもには一台もござりませんのでな）、その他ならなんなりといかほどでもそろつてゐるつもりでござります」

ドン・キホーテはこの城砦の城主のへりくだつた態度を見ると、それというのでも亭主も旅人宿も彼の目にはそう映つたからであるが、こう答へた。

「城主殿、拙者にはなんでも結構でござる、なぜと申すに、『物の具こそはわが晴着、わが休らいは戦なれ』というわけでござるからな」

すると亭主は、相手が城主と呼んだのは、自分をカステイリヤの野暮助だと思つたからに違ひないと早合点をしたが、そのじつ彼はアンドルシアのしかもサンルカル^{サンルカル}の浜辺そだちの男で、しかもカクス^{カクス}はだしの泥坊で、学生あがりの小姓も及ばぬ悪党だつたから、すぐさまこう答へた。

「そういうわけなら、『旦那の褥は堅き岩、君が熟睡は宿直なれ』つてやつでございませうな。そういうお方なら馬からお下りなさいまし。なあに一夜どころか一年じゆうでも、この荒屋なら寝ないでおいでなさる機会はいくらでも請け合つてござりますて」

こう言いながら亭主はドン・キホーテのために鎧を支援に進み寄つたが、当のドン・キホーテはいかにも日が一断食の戒を破らなかつた男らしく、ひどく苦勞し

て辛うじて馬から下りた。

するとさっそく亭主にむかつて、自分の馬はおよそ世の中で穀類を食う生物の中でも飛び切りの逸物なのだからできるだけ大切に扱ってくれるようにと申し入れた。そこで宿の亭主はいまさら馬に目をとどめたが、これはどうみてもドン・キホーテの言葉どころか、その半分も逸物とは思えなかった。で、亭主は馬を厩に連れて行って、お客の用命を承ろうと引き返してみると、もうすっかりお客と仲直りをした例の娘たちが鎧をぬぐ手伝いをしているところであった。胸当と背当はぬがせたものの、喉輪のどわをはずすことも例のできそこないの兜を脱がせることも女たちにはできないばかりか見当もつかなかった。これは有り合わせの緑色の打ち紐ひもでしばりつけてあったが、なにしろ結び目が解けないので、切ってしまうよりほかに方法がなかった。しかしそれはどうあっても本人が承知しないので、とどのつまりその晩は一晚じゅう兜をかぶったままでいたのであるが、これはおおよそ想像しうる中でも滑稽きわまる珍妙な姿だった。こうやって甲冑をぬがせてもらいながら、このぬがせてくれるすれっからしの女どもを、この城の貴婦人か上臈じやうらうだと思ひこんだので、ひどく気取って女たちに言葉をかけた。

「古里ふるさとより出で来し時の

ドン・キホーテにいやまして、

貴女らにかしずかれたる

騎士はこの世によもあらじ、

おとめらは彼をとりもち

姫どちは駄馬だばに仕えつ。

いや、それともロシナンテに、ですか。これはお二方、つまり拙者の馬の名前でござして、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャは拙者の名前でござるよ。じつはお二方につくした数々の武勲によっておのずと顯あらわされるまではわれから名乗るつもりでなかったのだが、さしあたってこのランサローテの古いロマンセを目下の場合に当てはめる必要から時機を待たずに拙者の名前をご存じになった次第でござる。とは申せ、ご両者が命令を下され、拙者がそれを遵奉とんぷうし、かつは身共の武力がご両者におつくし申そうという心意氣を發揮はつぱいいたす時節も到来いたそうて」

こういう美辭麗句を聞きなれない娘どもは一言半句も答えなかつた。ただ何か召しあがりたくはございませんかときいただけであつた。

「何なりとしたためたものだ」とドン・キホーテが答えた。「と申すのも、どうやら拙者の見るところでは、ちようどその時刻かと思わるるのでな」

幸か不幸かその日はちようど金曜日アウグスティノに当たっていた、したがってカステイリーヤで「鱈アウグスティノ」、アンダルシーアで

『バカリヤオ』、他の地方では『クラディーリヨ』と呼ばれた別の地方では『小紅鱒』と呼んでいる幾尾かの魚のほかはこの旅人宿じゅうどこを探しても何ひとつなかった。そこで人々は、他には差しあげる魚は何もございませぬが、いったいあなたさまは『小紅鱒』を召しあがりませうかとたずねた。すると、「小さな紅鱒でもたくさんあれば」とドン・キホーテが答えた。「大きな紅鱒一尾の代わりをするにちがいない。などといって、八レアルを細かいもので貰おうと八レアル銀貨で貰おうと同じことだからじゃ。のみならずおそらくその小紅鱒は、牛肉よりも犢がまさり、山羊より仔山羊の肉がまさっているように、結構なものにちがいない。したが、何はともあれ、さっそく持って来ていただきたい。なんと申しても甲冑の苦役と重量はしよせん腹がへっては持ちこたえられませぬのじゃて」

女たちは涼しいようにと旅人宿の戸口に食卓を据えた。するとそこへ亭主がろくすっぽ水にも漬けてない、おまけにでんで焼けてもいない干鱒少々と、これまた黒さ汚さでは彼の甲冑に匹敵するパン一片を運んで来た。しかし彼が食事をすする様子こそまさに噴飯ものだった。なぜなら兜をかぶり目庇をかかっているものだから、誰か他の者が食べさせてくれないかぎり、自分の手では何ひとつ口に入れることはできなかつたからであ

る。そこで例の貴婦人の一人がこの役目をひきうけてくれたのだった。しかしいざ飲み物を与えるという時になると、どうにもすることができなかった。いや、あれでもし亭主が葦の茎に孔を穿ち、一方の端を口につけて、片方の端からぶどう酒を流し込まなかつたとしてみるがいい。しよせん飲ませせることは不可能だつたにちがいない。しかもこういうわずらわしさを、ただ兜の紐を切りたくないばかりに、じつと我慢していたのである。

こうやっているところへ、たまたま豚のきんぬきを業とする男が旅人宿にやって来たのであるが、この男はやって来るが早いか篠笛を四、五へん吹き鳴らした。するとこれを聞いてドン・キホーテは自分がどこかの名の聞こえた城内にいて、人々が音楽を自分のために聴かせているのだ、鱒は紅鱒でパンは飛びきりの上等、白首は上臈だし、宿の亭主は城の城主だと信じこんでしまった。その結果己が決然たる門出をわれながらよくやつたと考えたのであつた。それにしてもなかでも彼の心を悩ましたのは、自分がまだ正式に騎士に叙せられていないということだつた、それというのにも騎士の位を授けられないあいだは、いかなる冒険にも公然とたずさわることとはできないと思われたからである。

第三章

ここではドン・キホーテが騎士に叙せられた滑稽な方式を語る。

こんな工合に、こういうもの思いに悩まされたおかげで、彼はいかにも安旅宿らしい乏しい夕餉をそこそこに片づけた。夕餉がおわると亭主を呼んだ。そうして亭主と二人きりで既の中に差し向かいになると、にわかに関手の前にひざまずいて、こんなことを言った。

「あいや武勇めでたき騎士殿、貴殿が拙者のご無心申したい恩恵をお授けくださるまでは、なんとしても拙者はここから立ち上がらぬ所存でござる。その恩恵たるや貴殿の名声、まった、人類の福祉に貢献いたすは必定でござろう」

すると亭主は足下に客人を見おろし、こういう言葉を耳にして、どうしたらよいものやらなんと答えたらよいものやらわからないで、ただ当惑して相手をまじまじとうちまもるばかりであった。そうして相手に立ち上がるようにしきりに頼んだが、なんととっても一向に聞き入れないので、ついには相手の求める恩恵を施そうと答えないわけにはいかなかった。

「さすがに貴殿の寛仁大度には予期いたさぬわけではござらぬて」と、ドン・キホーテが答えた。「されば、拙者のご無心申した、しかも貴殿が寛容にお許しなされた恩恵と申すは、余の儀にあらざ、明日という日に拙者めを騎士に叙してくださるということじや。そこで今夜は貴殿の城内の礼拝堂でわが甲冑の不寝番をいたしたい、さすれば明日はさきにも申せしごとく、拙者の切なる心願成就いたして、当然のことながら不幸な人々のためにありとある冒険を求めて世界じゅうの津々浦々を遍歴いたすこともできると申すもの。これはもとより騎士道の任務で、その望むところかくのごとき武勲に存する拙者もその一人たる、遍歴の騎士らの任務でござるよ」

ところで、さきにも述べたとおり、亭主はどっちかといえは人の悪い男だったし、それにそれまでお客の常軌を逸した点をいい加減感づいていたものだから、こういう相手の言葉を聞くやいなや、てっきりそうだと思いいんでしまつて、そのあげくは一番今夜の笑い草にしてやろうという魂胆から、相手の望むままにまかせようと早くも心にきめた。そこで言うには、いかにもごもつともなお望みでもあればご依頼でもある、のみならずそういうご志望はあなたの優にやさしいお姿の示すとおりの際とした騎士方に、いかにもふさわしいごく自然なものである、それに自分もご同様、やはりこれでも若い頃には